

福沢諭吉著「文明論之概略」岩波文庫、岩波書店、1995 年 3 月 16 日刊を読む

日本文明の由来－足利時代－

1. 古来、我日本は義勇の国と称し、その武人の慍慍にして果敢、誠忠にして率直なるは、亜細亞諸国に於ても愧るものなかるべし。就中、足利の末年に至て、天下大乱、豪傑所在に割拠して、攻伐止む時なく、およそ日本に武の行われたる、前後この時より盛なるはなし。一敗、国を亡す者あり、一勝、家を興す者あり。門閥もなく、由緒もなく、功名自在、富貴瞬間に取るべし。文明の度に前後の差はあれども、これを彼の羅馬の末世に北狄の侵入せし時代に比して、彷彿たる有様といふも可なり。この事勢の中にありては、日本の武人にも自から独立自主の氣象を生じ、あるいは彼の日耳曼の野民が自主自由の元素を遺したるが如く、我國民の氣風も一変すべきに思われるれども、事実に於ては決して然らず。この章の首にいへる権力の偏重は、開闢の初より人間交際の微細なる処までも入込み、何らの震動あるもこれを破るべからず。
2. この時代の武人、快活不羈なるが如くなれども、この快活不羈の氣象は、一身の慷慨より発したるものにあらざ、自から認めて一個の男兒と思ひ、身外無物、一己の自由を楽しむの心にあらざ、必ず外物に誘われて発生したるものか、否ざれば外物に藉て発生を助けたるものなり。何を外物という。先祖のためなり家名のためなり、君のためなり父のためなり、己が身分のためなり。およそこの時の師に名とする所は、必ずこれらの諸件に依らざるものなし。あるいは先祖、家名なく、君父、身分なき者は、故さらにその名義を作て、口実に用ゐるの風なり。如何なる英雄豪傑にして有力有智の者といえども、その智力のみを恃て事を為さんと企たる者あるを聞かず。ここにその事跡に見われたるものを撮て、一、二の例を示さん。
3. 足利の末年に、諸方の豪傑、あるいはその主人を逐ひ、あるいはその君父の讐を報じ、あるいは祖先の家を興さんとし、あるいは武士たるの面目を全うせんがためにとて、党与を集め土地を押領し、割拠の勢を為すといえども、その期する所はただ上洛の一事にあるのみ。

[コメント]

- (1)「足利の末年に…」という表現がこの「文明論之概略」に 2 カ所あるように、現在「室町時代」と呼ばれている時代は、古来、「足利」と呼ばれていた。今後は「足利時代」と呼ぶべきと考える。
- (2)齋藤孝先生の「現代語訳」(ちくま文庫)を参考に、福沢先生の「文明論之概略」を是非一度読了し、日本の将来を考えてほしい。